

## 82 「生涯学習社会 1.0」から「(同) 2.0」へ?! それに向けた「学会」の役割とは?!

堂本 彰夫

(1) 「Society5.0」のアナロジー (パクリ?)?! それでよいと思うが、そこに、肝心なことが書かれていない?!

『日本生涯教育学会年報 第44号』(2020)が送られてきた。昨年度の学会大会が、宮城県で行われる予定であったが、これもコロナ禍によって、急遽?オンライン対応のそれとなった! 『年報』は、通常、その学会大会の日に入手できるのであるが、今回は、止む無しの、後日(かなり遅れたが!)郵送となったわけである! 今回の年報特集テーマは、学会40周年を記念した「生涯学習研究の継承と挑戦」とあるが(他人事みたいであるが?)、徐々に、学会活動からの引き際(卒業?)を意識してきている私にしてみれば、非常に複雑な(後ろ髪惹かれる?)テーマである!最後のひと踏ん張り?で、重要なところは読んでみようと、早速、読み始めた!

まずは、長年に亘って学会を牽引されてきたY先生の「巻頭言(論文)」と、現在の、有力な学会員(役員)のGさん(前会長)、Aさん(過去2度の会長)、Sさん(現会長)、そして、進行役?のYさん(年報編集常任委員長)の、3(4)人による「鼎談」が載っていた。当学会の設立経緯や40年にも及ぶその軌跡が述べられており(もちろん、その人たちの記憶と切り口での回顧ではあるが?ただし、中心にいた人のそれでもあるので、事実上、ほぼそれに近いであろう?!)、改めて、当学会の役割・成果と社会への貢献の中身が、具体的に確認出来た!

ちなみに、鼎談者の一人Aさん作成の「生涯学習振興・推進を支えた主なメタ理論・技法一本学会会員の研究の場合一」(表1)、有志?で作成されたという、「生涯学習社会・生涯学習振興行政・社会教育行政等の時系列布置構造化の試み」(表2)も掲載されている。とにかく、今回の『年報』は、Y先生の「巻頭言(論文?)」(継承と挑戦一本学会40年の時点で一)も含めて(少し難解な言説ではあるが?)、読み応えのある『年報』であることは間違いない(ただし、まだまだ最初の部分を読み込んだだけであるが!)!流石、40周年記念号?ではある!

だが、読んでいて、秘かに感じ始めたのは、そこに、何か欠けている?それは、何だろうということであったが、それは、いわゆる「統合(理念)」(タテの統合/ヨコの統合)についての言及がないということであった?!私からすれば、「生涯教育学会」であるならば、その根幹の(「基本理念」である)「統合」(タテの統合/ヨコの統合)についての言及が、ここでは、絶対に必要なのではないかということであるが、それがなかったのである?!

改めて、「生涯教育/学習」とは、「教育/学習は、人生のある一時期のもの、あるいはその一時期で終わるものではなく、『生まれてから死ぬまで続くもの』であり、従来の「教育/学習」が、人生のある一時期の「学校教育」(中心の考え方やしくみ)で完結するものとなっているので、それらを、「生涯に亘るもの(lifelong)」へと転換させていくということを表明するものである(→タテの統合)!それ故に、それは、「学校前~後」に及ぶことになり、しかも、それは、「いつでも、どこでも、誰でも、(何でも、どこからでも)」ということを前提とするので、必然的に、「全生活に関わるもの(lifewide)」ということにもなるわけである(学校内・外→ヨコの統合)!だから、我が国では、その任を、「社会教育」が大きく担う(べき)ことになったわけでもある?!

大事なことは、「教育」や「学習」の捉え方、というよりは、そのあり方(態様→システム?)が、抜本的に?問われたということなのである?!「生涯学習体系への移行」(「臨教審」とか、「生涯学習社会の実現」(「教育基本法」とか)ということとは、実は、そういうことなのである!したがって、「生涯(教育/学習)」という表記の本質は、その部分(「統合」)への問題(課題)意識があるということなのである(少なくとも、私自身は、そう捉えている!)?!繰り返すが、そのことへの言及がない?のである(そのこと自体は、話の大前提であったのか?)!

(2) 「生涯教育(学習)」に託されたものは、一体何であったのか?!それは、「統合(の理念)」ではなかったのか?!

そこで、今回掲載されている、当学会の「設立趣意書」(資料1)を見てみると(恣意的な抜粋で恐縮ではあるが!)、…教育問題に対する関心の高まり…新しい教育のあり方が模索されるなかで、生涯教育の必要性が強調…その進展なしには日本の発展も望めない。生涯教育時代が到来した…この新しい教育問題の解明をめざして総合的な見地からの研究とその発表の機会を確保する必要…既存の学問分野の枠をこえ、生涯教育に関心を寄せる研究者・実践家を結集…教育学・心理学・社会学・体育学・政治学・法学・経済学・哲学など関連諸学問の研究者や教育関係者・行政関係者・職場関係者・レクリエーション関係者などに…参加を呼びかける…。(昭和54年10月10日/「日本生涯教育学会」呼びかけ人一同)とある。

改めて、ここに、「日本生涯教育学会」の設立経緯と、その存在意義が確認されるのであるが、今、この「趣意書」と照らし合わせてみると、現状の問題点・課題は、どのようになるのであろうか?40年間という時日の流れを、そう簡単に俯瞰できるとは思わないが(私には、その資格さえないが!否、能力も?)、一応は、この「設立の趣意」は、その時々学会員の努力と熱意によって、活かされ、そして、発展させられてきたとは言えるであろう?!つまり、それまでの「教育」や「学習」のあり方を、総合的に(ある意味抜本的に?)変えていこうという動きはつくられてきたということである(それが、まさに「統合 integration」ということであったわけである?)?!

そうした中で、私が、ここで、特に強調(再確認)したいことは、「生涯教育」(の研究と実践)と「社会教育」(の研究と実践)は、理の当然として、大いに重なり合うところがあるわけであるが、その研究対象やテーマ(の

具体) は、それぞれ別になるということである?!何故なら、ある意味単純なことではあるが、「生涯教育」(の概念/目的)と「社会教育」(の概念/目的)は違うからである?!ただし、実際には、「生涯教育」≧「社会教育」(※これが、一番現実に近いか?)、「生涯教育」=「社会教育」、あるいは「生涯学習」≧「社会教育」、「生涯学習」=「社会教育」というような理解、概念の錯綜が現れ、行政の関係部署等の名称にも、その(悪?)影響が大きく見られた!しかも、「社会教育」においては、「教育よりも学習、さらにはまちづくりの方が適切?」ということで、用語的には、別な拡散(混乱?)もあった(それだけ、それぞれは密接な関係があるということである!)?!

なお、別に、「生涯学習・社会教育」という表記・表現を行う人達もいるが(当然、当学会員にもいる!)、多分?これは、「生涯教育」という理念や取り組みには、従来の「社会教育(行政)」だけではなく、その他の(様々な?)社会教育的なもの(決して「社会教育(行政)」という概念や枠組みで括れない!否、括ってはいけない?)も、同じように大切であり、これらを総合的に(統一的に?)見ていく必要があるという、使用者の「見解(哲学?)」が反映しているということであろう(実際には、あまり深い意味ではなく使っている人もいないかもしれないが?)?!

**(3) 改めて、何を、どうすればよいのか?!やはり、それは、「教育/学習」の「三(四)層構造」への目配り?!**

とは言え、ここで重要なことは、やはりそこに、「学校教育」のことが、どのように理解され、受け止められているかである(当初、学会では、当然「学校教育(関係者/研究者)」も多くいて、それと「社会教育(関係者/研究者)」の、いわゆる「車の両輪」での「生涯教育論」が謳われていた?そしてまた、「二つの46答申(社教審/中教審)や「56答申(中教審)」は、少なくともそういうスタンスであった?!)!

であれば、改めて、「生涯教育」(の研究と実践)には、どのようなことが求められるのか?それは、私の理論?で言えば、「教育/学習」の「三(四)層構造」への目配りということになる!それは、「教育と学習」は、表裏一体(密接不可分)の関係であることを、改めて確認し、その全体の、社会でのあり方(理念やシステム)をよりよいものにしていくというスタンスと、そこにおける問題点や課題の提示ということである!別言すれば、まさにユネスコが提唱してきた?、「フォーマル教育(FE)」、「ノンフォーマル教育(NFE)」、「インフォーマル教育(IFE)」及び「偶発的学習(IL)」の総体のことであるが、それらが、今、どのようになっているのか?それらの関係が、今後どのようになればよいのか?あるいは、そこに有望な可能性や芽があるとしたら、どこを、どのようにしていけば、それらが実現されるのか等、そこを、まさに「統合」という観点から提示していくということである!そのスタンスこそが、「生涯教育」(と名乗る意義)ということである!

ちなみに、これは、たとえ「生涯学習学会」と名乗っていたにしても、同じことである!何故なら、その理念は、どちらの用語を前面に出そうとも、目指すべきところは同じであるからである(ただ、それぞれの表記には、それなりの意味、思いが込められてはいる!まったくの自由・恣意交換で、双方を使用している人もいるが!)!すなわち、「教育」にしろ、「学習」にしろ、それらが、人生のある一時期のもの、あるいはある一時期で終わるものではなく、「生涯に亘る(lifelong)」(べき)ものという捉え方があるということである(→タテコの統合)!

したがって、例えば「社会教育」(の研究と実践)とは、そうした「生涯教育」のスタンスの中で、いわゆる「学校教育(「フォーマル教育(FE)」)」以外のところで行われている、多種多様な(「ノンフォーマル教育(NFE)」、「インフォーマル教育(IFE)」及び「偶発的学習(IL)」における)教育/学習(こういう言い方しか出来ないが、そこにある意義は、実は、個人にとっても、社会全体にとっても、大きなものがあるのである!最近、そのことが再認識されてきているとも言える?)について、研究と実践をする分野・領域となる!

少なくとも、このように捉えれば、用語上の混乱(矛盾?)がなくなるとともに、それぞれの概念の存在意義(役割や目的等)、そして、その相互の関係も明らかとなるということである?!もちろん、そこに、「学校教育(「フォーマル教育(FE)」)」との関係づくりが、含まれていることは言うまでもない?!そして、一方の「学校教育」の役割や、今後動いてくべき方向性も、そこから見えてくるはずである(「学校教育」とか「社会教育」とかいうものは、ある意味後付けのものである!「教育/学習」、それ自体は、それ以前のものであり、生活そのものでもあるのである!)?!

なお、ここでは余談?かもしれないが、もう一つの「社会教育学会」の存在、あるいはそれとの関係についてであるが、結論から言えば、それぞれの時期の関係者のみなさんが、精一杯、そのように思い、そのようにふるまってきたわけであるので(ある意味、不遜な物言いではあるが?)、それはそれで、歴史の一コマとして、冷静に受け止めればよいということになる?!「研究(理論と実践)」というものは(特に「社会科学」の分野においては?)、常に、体制への「迎合」と「批判」を併せ持つものでもあるからである?!したがって、それは、一つの健全なあり様であったとも言えるであろう(現実には、理論/知見において、否、その背後にある人間関係において、かなりの修羅があったかもしれないが?ただし、最近、随分変わって来た?)?!

そこで、最後になるが、私自身がやってきた(やれた)ことは、ほんの微々たるものであったが(否、それにもなっていない?本当にそう思っている!)、その意味で、後悔や自責の念もないわけではないが、私自身の置かれた立場(or能力?人間性?)、私自身の生活の現実からすれば、私なりに精一杯やってきたとは言えるであろう?!そして、それは、誠心誠意、研究や実践を行ってきた人には、大変な申し訳なさも感じるが、それが、私がなし得た、唯一のものであったことも、これまた事実であろう?!